

巻頭言 「日本生物学的精神医学会誌」を振り返る

中川 伸

山口大学大学院医学系研究科高次脳機能病態学講座

10 年ほど編集委員を続け、今年度に編集委員長に就任したのを機に機関誌について振り返ってみたいと思います。

日本生物学的精神医学会は 1987 年に設立され、その機関誌として「脳と精神の医学」第 1 巻 1 号が 1990 年 10 月に発行されています（奇しくも自分が精神科医になった年です）。しかし、「脳と精神の医学」としては 2009 年の第 20 巻 4 号が最後となり、2010 年からは現在の「日本生物学的精神医学会誌」に改名されています。2017 年からはオープンアクセスの流れもあり、J-STAGE [国立研究開発法人科学技術振興機構 (Japan Science and Technology Agency : JST) が運営する電子ジャーナルプラットフォーム] にアップするようになりました。また、2020 年からは学会ホームページ上にも PDF が掲載されるようになり、紙版が終了しています。

現在の学会ホームページでは、タイトルだけであれば 2006 年の第 17 巻 1 号から確認ができます。また、2009 年の第 20 巻 1 号からは J-STAGE を通じて記事内容も容易にダウンロードができ、すべてが見られます。学会ホームページも完全にオープン化されており、学会員以外の方々も見ることができるようになっています。

さて、今から 18 年前の 2006 年の第 17 巻 1 号、第 27 回日本生物学的精神医学会シンポジウムから企画された特集内容を見てみましょう。

〈特集 1〉ストレス性精神障害の生物学

1. PTSD の神経画像解析
2. 外傷後ストレス障害 (PTSD) の神経心理学
3. 不安障害の生物学
—不安障害研究への新しいアプローチ—
4. 心身症の生物学
5. 疲労の科学

〈特集 2〉統合失調症の発達障害仮説

1. 統合失調症関連遺伝子とその機能

2. PACAP 欠損マウス 新しい精神機能障害モデル
3. サイトカインを用いた統合失調症のマウスモデル 環境・遺伝子の相互作用
4. DISC1 関連因子の解析
5. 発達障害仮説における大脳皮質形成関連遺伝子の意義

いかがでしょうか？あまり古くささを感じさせないのではないのでしょうか。

「日本生物学的精神医学会誌」は 1 年間に 4 巻発行されています。投稿規定における編集論文の種類には、研究報告、短報、総説 (Review Article, Mini Review)、症例報告、討論の広場、Letters to the editor などがありますが、投稿数は残念ながらかなり少ないのが現状です。このようななかで、編集委員会では年会シンポジウムの中から記録に残しておきたいシンポジウム内容を領域が偏らないように選び、「特集」を組んでいます。さらに最近では、若手研究者育成プログラム奨励賞や若手最優秀奨励賞の受賞者に研究内容を「Mini Review」していただき、トップジャーナルに掲載された経験、最先端の研究に携わった経験、海外留学の経験などがある先生から、その経緯や考え方、ご苦労などをざっくばらんに聞く「わたしの研究」というコーナーを設けて原稿を依頼、掲載しています。幸い依頼したほとんどの先生から、非常に丁寧な原稿をいただいております。

今回、巻頭言を書く機会をいただき、改めてこれまで発行された機関誌を眺めてみましたが、比較的容易にわが国の生物学的精神医学の潮流を把握できること、自分の専門としない領域の有益な情報が詰まっていることを実感しました。皆さまもぜひご活用ください。また、寄稿していただく先生には自分の研究についてまとめる機会として、さらには普段は接点のない他分野の研究者への自己紹介の一つとしてとらえていただければと思います。